

第83回

会社訪問



株式会社カトー

会社プロフィール

代 表 者：代表取締役社長 加藤幸子

所 在 地：〒354-0004 埼玉県富士見市下南畑3767-8

T E L：049-251-1205 F A X：049-253-3865

設 立：1970年6月（創業：1969年3月）

資 本 金：9,800万円

従 業 員：50名

営 業 所：大阪営業所

事業内容：環境試験器、恒温機器の設計、製造、据付け、
および保守、点検サービス

U R L：http://kato-net.co.jp

（株）カトー 代表取締役社長 加藤 幸子 氏へのインタビュー

聞き手：山口 美奈子（広報委員） 蔵満 邦弘（専務理事）

（取材・撮影・編集協力：クリエイティブ・レイ株）

高い技術力で国内外の顧客ニーズに応える
“恒温機器・環境試験機器メーカー”

— 御社は昭和44年に科学機器協会にご加入いただき、長年にわたって協会の活動にご協力をいただいております。その間、加藤社長と先代社長の故加藤正昭様は力を合わせ御社を発展させてきたと思いますが、まずは、先代社長がどのように会社を創業されたのか、お聞かせいただけますでしょうか。

先代社長は工業高校を卒業後、大日本印刷、東証での株の売買、乾燥機メーカーなどを経て、当社を立ち上げました。乾燥機メーカーには東武東上線でたまたま見た広告をきっかけに入ったそうですが、その前に株の売買で失敗をしてしまい、両親を心配させまいと入社を決めたそうです。

当初はこの埼玉県富士見市にある実家の一角を借りて、下請けとして乾燥機を作り始めました。ところが、やがて注文をもらっていた会社が倒産してしまい、それを機に、直接お客さまと取引のできるメーカーになろうと思ったそうです。そしてメーカーとしてやっていくためには、技術力を磨き、乾燥機だ

けでなく環境試験器も手がけ、信用力や知名度を高めていかなければならないと考えたようです。

— 創業当初、顧客の開拓などにはどのようにされていたのでしょうか。

初めはとにかくPR活動に専念しました。科学機器協会の展示会などにも出展し、カタログ、ダイレクトメール、新聞広告を使って社名を知ってもらうことに努めたようです。先代はチャレンジ精神が旺



シャープのマレーシア工場にて
工場責任者（左）と故加藤正昭前社長（右）

経営資料

盛で、創業から4年目の昭和48年には大阪にも営業所を開設、同じ年には韓国にも製品を納めるようになりました。その後は台湾、中国、タイ、マレーシア、シンガポールなどにも積極的に出向き、海外にも販路を広げていました。

そうしたお付き合いから、日本で液晶テレビの生産が増える少し前の平成7、8年ごろには、韓国のサムスンやLG電子に液晶テレビの環境試験の設備を納品するため、現地によく足を運んでおりました。

——先代社長は製品開発から営業まで精力的に取り組まれていたようですが、正昭社長がモットーにされていたことはございましたか。

「メーカーとしてやっていくには、ブランド力をつけなければいけない。そのためには品質と信頼性を高めることが大切だ」と言っていました。それと他人のコピーをすることを嫌っていました。ただ、先代は品質を追求する一方、コストを軽視するところがあり、経理を担当していた私としては、お金の心配はさせたくないと言っていたのですが、資金のやり繰りには苦勞をさせられたこともありました。(笑)

しかし振り返ると、そうした先代の努力があったからこそ、リーマンショック以後、日本中が不況の中であっても、リピートの仕事をいただくことができたのだとも思います。

——リピートの仕事というと、例えば、どのようなものがあったのでしょうか。

リーマンショック後の大きな仕事としては、タイに進出した大手のメガネレンズのメーカーからの注文があります。一昨年タイで洪水が起きましたが、それによって当社が十数年前に納めた機械が使えなくなったとのことでした。レンズを熱処理をする機械だったのですが、別の機械では代用ができないようで、45台もの注文をいただきました。なお、支払いは保険で対応できたということです。

リーマンショック後は当社も売上が落ちましたが、昨年からだんだん上向いてきています。

——一時期、液晶テレビの生産が盛んになった時期があったかと思いますが、御社ではどのような状況だったのでしょうか。

平成10年ごろ、液晶テレビに沸いた時期があり、日本の大手家電メーカー各社から、大型エージング槽という何十台もの液晶テレビを並べて環境試験をするための大型設備の注文が入りました。

ところが、この設備は売上の数字は上がるのですが、利益を出すのが難しく、その後、注文を受けてもお断りするようになりました。幸い、それに代わるようにして、平成15年ごろからは、カーナビの環境試験器の注文をたくさんいただくことになりました。

——御社の会社沿革を拝見すると、昭和59年に世界初のCRTペンタッチ計装を完成、また、平成5年に第6回埼玉工業デザイン奨励賞、平成8年に埼玉産業人クラブ西海記念賞を受賞されています。製品開発に力を注いできた成果ということでしょうか。

CRTペンタッチ計装はペンを使って操作する、当時としては珍しいものでした。また、埼玉産業人クラブ西海記念賞を受賞したのは、急速昇降温型低温恒温器というものです。小型でスペースもとらず、急速に温度を変えることができ、温度のストレス試験に用います。当社は「環境試験器と恒温機器の未来を拓く」という創業以来の企業理念のもと、電子機器、食品、医療、自動車関連、新エネルギー、宇宙開発部門へ事業領域を拡大してまいりました。それを今後も継続していきたいと思っています。

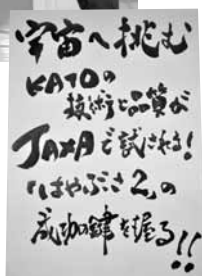


世界初の
CRTペンタッチ計装
(昭和59年)



▲JAXAにも納品された大型気象環境試験室・ダイナミックシミュレーターの小型タイプ

現場に掲げられた宇宙品質の
ものづくりに対する熱い思い



昭和49年から36年間JAXAで活躍した熱風循環式恒温器KATEX

— 御社では JAXA（宇宙航空研究開発機構）にも「大型気象環境試験室」という大型恒温槽を納めています、これはどのようなものなのでしょうか。

JAXA の宇宙環境試験室で採用されているもので、宇宙という過酷な環境を作り出し、人工衛星や惑星探査機などの環境試験に使われているそうです。

— 温度範囲は -60°C ～ $+80^{\circ}\text{C}$ 、温度制御精度は $\pm 1.0^{\circ}\text{C}$ とありますが、開発にあたって苦労された点はございますか。

JAXA との最初のお話では、最低温度は -40°C という注文でした。しかし、当社からもっと低い温度でも実現可能であることを提案すると、それなら -60°C で、ということになり、ハードルを高くしてしまいました。（笑）

— JAXA からどのような経緯で依頼を受けるようになったのでしょうか。

JAXA に機器を納入している会社から声をかけていただいたことがきっかけでした。実は、JAXA の前身である東大の研究室で、当社のオープンがずっと使われており、そういった縁もあって、お声がかかったようです。

— 現在、御社の本社・工場がある富士見市の工業団地を作るときに、御社の先代社長がまとめ役として尽力されたそうですね。

この工業団地は2年かけて作られ、昭和63年8月に完成しました。全部で14社が入っていますが、先代がこの工業団地の理事長となり、市とともに富士見市および近隣の地域の企業を回って工場を誘致し、彼なりに心血を注いで作り上げました。ところが、その後の平成元年、彼が46歳のときにくも膜下出血で倒れ、病魔との戦いとなりました。

— その後、会社にも復帰されたようですが、後遺症などはなかったのでしょうか。

奇跡的に回復し、会社にも復帰しましたが、以前のように早口でなくなったり、すぐに考えが出てこないこともあったようです。本人にはつらいこともあったと思いますが、その反面、怒ることがなくなり、いつもニコニコしているようになりました。

— ところで、御社の展示フロアに子供たちからの感謝の手紙がありますが、どのようなものなのでしょうか。

当社では社会貢献活動のひとつとして、地元の小



工場見学の感謝状を手にした、娘の佐々木智恵子取締役と幸子社長

学生の工場見学を受け入れています。息子が小学生だったころ、担任の先生から工場見学をできるところはないかと相談を受けたことがきっかけでした。それならば当社でということで、受け入れを始めたのです。工場見学では、当社製品によって-40℃で凍らせたバナナで釘を打ったり、凍らせた花びらが薄いガラスのように細かく割れるところを見せたり、スライスしたバナナを凍らせて子供たちに食べてもらったり、いろいろなことを見せしています。子供たちが喜んでいて顔をみると、つくづく工場見学を受け入れてよかったと思います。

——加藤社長の社長就任は平成19年とのことですが、経営方針や加藤社長ご自身の人生観などをお聞かせいただければと思います。



急速昇降温型低温恒温器NEXIS(埼玉産業人クラブ西海記念賞)の製造現場



低温恒温器シルバリーエンペラーのチェックをする現場スタッフ

当社の製品の割合は標準型が20%、準特殊品が40%、特殊品が40%となっており、豊富なカスタマイズの実績があります。これまで培っていたその実績をベースに、今後もお客さまのニーズを的確に捉え喜ばれるモノづくり、そして信頼性と品質を確保し世界に通用する製品づくりを行っていきたいと考えています。また、娘夫婦である佐々木取締役兩名を後継者として、現在、財務、人材、生産性など内部環境の整備を行い、経営の継承も進めています。

私自身を振り返ってみますと、これまで山あり谷ありの道を歩いてきたように思います。それでもこうして今日あるのは、周囲の人たちの協力があったからに他なりません。だからこそ誰に対しても感謝のできる人間でありたいと常に思っています。

深みのある書を目指し書道に挑戦中

趣味としては、書道、カラオケ、孫とのメールのやり取り、友人たちのお茶、卓球などを楽しています。書道はまだ始めたばかりですが、他のことは忘れ、自分の世界に集中できるところが気に入っています。先日もダウン症の女流書家である金澤翔子さんの個展を見てきたのですが、深みのあるその書に感動しました。